

AMD A兵庫 ネパール支援を中心に 神戸で活動振り返る写真

夏の取材旅行で訪れたAMD A。本部は岡山市にあるが、全国にも支部がいくつかある。兵庫県にも兵庫県支部があつて、活発に活動している。その兵庫県支部がひょうご国際プラザ交流ギャラリー（神戸市中央区、国際健康開発ビル2階）で「AMD A兵庫支部 写真展」を11月15・25日にかけて行った。展示を見学し、兵庫県支部の活動について、支部長の江口貴博さんに伺った。



日本語とネパール語の絵本「ありがとうね」

他にも、ネパールにAMD Aの子ども病院が出来るまでを綴った、AMD A兵庫のメンバーで医師の、すずきよしひろさん作・画の「ありがとうね」という絵本の原画も展示してあつた。これは、ネパールと日本の繋がりをテーマにしたもので、日本語・英語・

の活動の軌跡を紹介するパネルが展示されていた。

◆展示
ギャラリーには、スタッフらが撮影したネパールの生活の様子、AMD Aネパール子ども病院、東日本大震災支援の様子と被災地の現状などの写真や、AMD A兵庫支部

遺志を継ぐ

◆支部の活動

兵庫支部の主な活動場所となっているのはネパール。なぜネパールかというと、AMD A兵庫支部設立に大きく関わる次のような話があるからだ。

後にネパール子ども病院の初代院長になる、ネパール人のポカレル医師が日本に留学していたとき、日本の医療技術の高さや衛生管理に強い関心を抱いた。一方、AMD Aからネパールのブータン難民救済のために派遣されて診療活動していた篠原医師は、ブータン難民の子供の瞳の美しさに感動し、子供たちのために何とかしたいという思いをもって帰国した。その二人が出会い病院を建てようということになったのである。

ちょうどそんな時、阪神淡路大震災が起る。震災では、多くの国が支援を行ってくれ、その恩返しをしようと思病院建設計画も熱を帯びてくる。その途中に篠原先生は病気がかかって亡くなってしまつた。

ネパール子ども病院を支える

篠原先生は死ぬ間際まで、病室に電話を持ち込んで病院設立のための資金繰りの交渉を行っていた。その先生の悲願が叶つて、1998年11月2日にネパール子ども病院が開院した。設計は、世界的建築家、安藤忠雄さんが無償でしてくれたのだという。

出来た病院には50のベッドがあつた。しかしすぐに一杯になり、2002年に新たに病棟を建てた。この病棟は「篠原記念病棟」と名づけられ、合わせてほぼ100のベッドとなった。それでもまた、患者が入りきらない状況になつた。そこで、今年か来年にはさらに新しい病棟が建設される予定だ。

今までは、ベッドが少なく、2人3人で一緒に使わなければならず、特に女性のプライバシーが守られなかったが、これでプライバシーが守られるとスタッフは期待をよせている。

ところで、篠原医師と一緒にこの病院建設のために取り組んだメンバーが主となって設立したのが、AMD A兵庫支部である。2007年9月1日のことだつた。

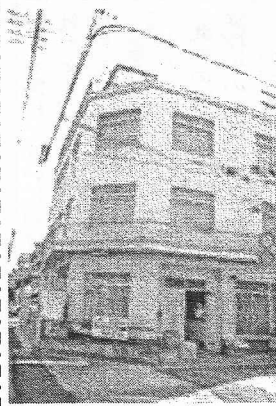
「兵庫支部を設立してからは、三本の柱をモットーに活動している」と江口さん。それは、

1、世界中の恵まれない女性や子供たちのため

の病院を中心とする医療支援、2、（兵庫に多い）ベトナム人などの在日外国人が医療を受ける際の医療通訳、3、日本の小児医療におけるメンタルケアの実施、である。3番目は「具体的には、クリニックラウン（ピエロ）などを派遣している」ということだつた。



篠原 初代院長は、ブータン難民救済でネパールで活動した時、ポカレル医師とともにネパール子ども病院の建設の決意を固めました。



■AMD A兵庫支部
明石市日富美町のハリマビル3階にある、障害者のための作業所である「にじ作業所」を本部とする。江口さんがにじ作業所の理事長であるためAMD Aの県支部にもなっているが、江口さん曰く「形だけのもの」で、常駐者はいない。医療関係者は毎月第1日、第3日、第5日、第7日、第9日、第11日、第13日、第15日、第17日、第19日、第21日、第23日、第25日、第27日、第29日、第31日、毎週日曜日に神戸で行われ、誰でも参加可能である。

支えてくれる人があってこそ



AMD A兵庫県支部長の江口さんとスタッフ

女性たちが「毎月出し合って貯めておき、出産や病気の時にそれを使うという小さな保険制度のようなものだ。さらに「いくつかの保険制

世界の子ども達のために

「一人種、貧富の差、宗派を越えた合同慰霊祭」を行ったという。慰霊祭には日本の歌手であるダ・カーポさんも参加し、自身が作った『命の華』を熱唱。そのとき、ネパール語と日本語の合唱が起こったという。

「医療ボランティアは『医療だけ』ではない。現地で行っているのは医療だが、支えてくれる人がいるのを忘れてはいけない」と江口さんは熱を込めて語った。

◆支部長の思い

江口さんには、悩みがあったのだという。それは「日本の先端医療を押し付けるのがプラスになるのだろうか」ということだった。言葉の壁が

江口さんの言葉にボランティア精神とはどうあるべきか深く考えさせられた。

取材班

2年 川嶋望
増本隼也

1年 小南浩之

◆ネパールの現状
ネパールでは現在でも衛生環境がよくない。江口さんは「夜は停電するし、シャワーの水がにごっていたりする。歯ブラシに水をつけて歯を磨いたり、野菜などを食べたりしただけでも下痢になる。だから、水は持っていくか、現地で購入する」とその現状を語る。

病院を設立してからは医師や医療スタッフなどをネパールに派遣し、現地スタッフに技術指導、母子保険の導入や健康の指導（健康促進）などを行っている。現地には保険制度がないため、普通なら十割の全額負担のところを十分の一の医療費で行っている。

「ただだと病院が成り立たないから。またネパールの自立を促すのを兼ねてこの値段」だそうだ。他にも女性基金「頼母子講（たのもしこう）」も作っている。

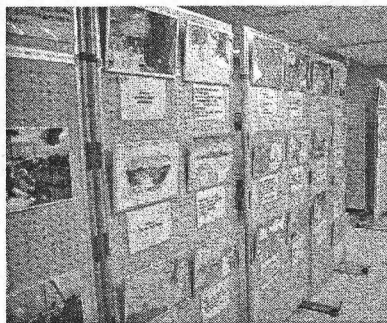
女性たちが「毎月出し合って貯めておき、出産や病気の時にそれを使うという小さな保険制度のようなものだ。さらに「いくつかの保険制

度の導入を考えている」ということだ。

AMD Aの活動のかいあって、ネパールの5歳までの死亡率が2004年に91人（対1000人）だったのが、2009年には48人まで下げることができた。

◆合同慰霊祭

2009年の1月17日に行われたこども病院開院10周年記念式典では、阪神淡路大震災で亡くなった人と、ネパール子ども病院で治療の甲斐なく亡くなった人たちのための



絵本「ありがとうね」の原画も展示されていた

ある。社会整備ができていない。バリアフリーもできていない。それ以上に、医療水準が違う。そんなネパールに日本の医療がそのまま役に立つのかという問題だった。

しかし「まず簡単に救えられるものからはじめよう」と決心したという。「お金のない人をどう救おうか、と考えたとき、女性のために刺繍工場を作ろうかと思った」こともあるのだとか。

江口さんは「自分が治療した人が障がいを負ってしまったこともあって、世界中の子どもたちのために何かしてあげたいと思った。ボランティアの時は『自分が何をしたいか』という思いを大切にしている。自分のことだけで一生懸命になるのは少し悲しい」と語り、ボランティアに最も大切なことは「なにか一本の柱があること」という。

そういつた精神から、江口さんはAMD A兵庫県支部長だけではなく、にじ作業所の理事長も勤めていて「医療だけにこだわっていただけでない。相手が迷惑でない限りなんでもする」のだと語る。

最後に江口さんは「種をまくのが楽しいし、若い子に物ごとを教えるのはよい経験になる。人生にはいろいろなお話がある。どう乗り越えていくか、他人のためにどれだけ出来るかが大切だ」と語った。